

荏柄天神社の天満天神などに対して、政治や裁判をその御成敗式目に基づいて公平に行なうことを誓っている。鎌倉幕府は、このように神仏への信仰に基づくことで、京の律令とは異なる基本法を定めることが可能になった。

泰時は、京都から導入した保や^{ほう}簀^{かぎり}屋制度などで鎌倉の治安維持を図ると共に、三方を山に囲まれた鎌倉の内と外を結ぶ切通については、巨福呂坂や朝夷奈の路を新たに開拓し、海辺の和賀江には、勧進上人に合力して突堤、和賀江嶋を築いた。鎌倉は、自然の要害の地という性格から、外に開かれた都市へと成長していった。

こうした泰時の時代に、鶴岡八幡宮と並んで重要なのが、鎌倉の西側に泰時が勧進上人を援助して造営した大仏である。大仏造営の費用は、勧進上人が民衆から集めて造営した。この上人が浄土宗の僧であったことから知られるように、この時期、京都で信仰を広げていた浄土宗の僧が続々と鎌倉に入ってきた。武家政権は、積極的に京の政治と文化を取り入れることにより、鎌倉幕府の骨格を整え、武家文化を豊かなものにしていった。その動きを象徴するのが、大仏と建長寺であり、その二つは武家政権と鎌倉を象徴するモニュメントとなった。

◎新たに宋文化を取り入れて、国際的都市へ

しかし大仏は、それまで木造であったものが、次の時頼の時代になると金銅製の仏像に変えられた。その鑄造には、大陸から輸入した銅銭や技術が使われた。このように新たな権力の樹立に当たって積極的に導入されたのが大陸・中国の文化である。それを最もよく物語るのが、禅院、禅宗の寺として建立された建長興国禅寺だ。

その意気込みは、開山として宋朝の僧・蘭溪道隆が充てられたことにも表れており、ここに本格的な大陸の規式に基づく禅宗寺院が生まれたわけだ。禅宗は幕府の厚い保護を得て、鎌倉に定着していった。

時頼の死後に若くして政治指導者となった時宗は、二度にわたるモンゴル襲来を、広く御家人を動員して退けた。時宗は、高名な禅僧の無学祖元を宋から招き、建長寺に次ぐ禅宗寺院として円覚寺を建立しその開山としたが、これには二度の合戦で亡くなった人々の霊を、敵味方なく慰めるという意図があった。

中国からは仏典や漢籍が入ってきた。それらの仏典や漢籍、さらに日本の古典文化などの学習も進み、和書、仏典、漢籍などを収集し、それらを納める称名寺にある金沢文庫のような図書館も生まれた。

鎌倉に入ってきた仏教信仰は、禅宗だけではない。武家の保護を求めて、戒律の護持を求めた律宗、あるいは法華經に基づく政治改革を求める法華宗(日蓮宗)、そして、踊り念仏と、念仏札の配布によ

て念仏を勧める念仏宗である時宗が、それぞれに鎌倉を目指して来た。幕府は戒律の重要性を認識して律宗を受け入れたので、極楽寺や称名寺、浄光明寺、覚園寺、こうした新たな律宗寺院が発展していった。

◎鎌倉独自の武家文化が日本各地へ広がる

このように、時頼・時宗の時期を通じて幕府体制の整備が図られ、宋風文化を取り入れることによって、幕府と武家文化は独自性を強め、それが武士や僧を通じて、今度は鎌倉から日本の各地の社会へと広がっていった。

時宗の死後、北条貞時が執権のとき、幕府の歴史書『吾妻鏡』の編さんが、北条氏一門の金沢氏の周辺で、奉行人を動員して行なわれた。この時期にも、鎌倉には多くの禅僧がやって来たが、中でも一山一寧は、武士への禅宗の普及に力を注ぎ、その門下から多くの禅僧が育っていった。北条貞時は禅を学んでよく理解し、五山の制度を設けて禅宗寺院を手厚く保護した。

鎌倉は三方を山で囲まれ、狭い土地だから、山や谷の開発が進められ、谷奥に寺院が建てられ、禅宗寺院には庭が造られるようになり、瑞泉寺のような禅の境致に関わる庭園も造られた。お墓も、「やぐら」と称される横穴のお墓が広く掘られた。もともと鎌倉の近くにはこうした岩窟があり、修養の場とされていた所に、禅僧が中国の横穴墓を持ち込んだことに相まって、「やぐら」の風習が広がった。

鎌倉に生まれた武家政権と武家文化は、幕府の滅亡前から、京都や各地に大きな影響を与えた。まず、鎌倉の禅宗寺院における文化は、京都の五山の成立とその文化を生み出し、両者が影響し合いながら成長した。それは、五山の宗教と文芸において多方面に展開してきたが、さらに、その庭園や建築にも影響を与えた。

◎鎌倉の価値を世界にどう伝えるか

以上、鎌倉の武家政権と文化を物語るような文化財が鎌倉には良好に保存されており、その文化を含んだ景観もまた、鎌倉には良く残されている。鎌倉幕府の滅亡後も、後の武家政権により、武家の古都、聖地として厚く保護されてきたことも大きな理由だ。さらに近代になってからは、その歴史的な風土が好まれて、積極的な景観の保存が行なわれてきた。

このような形で、鎌倉の学術的な研究は進んでいるが、やはり世界的に、この鎌倉の価値を分かりやすくどのように伝えていくか。これが非常に大きいことで、強く求められている。単に歴史都市ということではなかなか難しいということはお指摘があったし、これからクリアすべき課題が多いということ、ヤング先生もおっしゃった。しかし、そういうことを一つ一つ突破できるだけの力を、鎌倉は備えているということを強調しておきたい。